

勤務医部会だより

診療支援と退院支援の 師長のすぐれた能力とパワー



幹事 森田明理

(名古屋市立大学病院副院長(診療・医療体制強化担当)
名古屋市立大学大学院医学研究科

加齢・環境皮膚科学 教授)

日頃から皆様には大変に御世話になります。

2010年から3年間の総合研修センター長(病院長補佐)から病院執行部としての仕事を始め、2015年から研究担当の副院長として、愛知県特区特例に関わる先進医療の優先審査、認定臨床研究審査委員会等の申請を行い、いずれも承認を受けています。2018年4月から、診療・医療体制強化の担当をしておりますが、病院には本当にさまざまな仕事があると思います。あたらしい担当になるごとに、よく勉強し、考えて仕事をしていかないといけないことはもちろんのこと、当然ながら関連する文科省、厚労省、東海北陸厚生局、医師会、愛知県、名古屋市、地域の医療機関などとの連携も図る必要があります。

さて、2018年の医療体制強化、すなわち、地域医療連携センター長の担当になってから、愛知県医師会勤務医部会幹事にもあわせて就任いたしました。勤務医部会に時々参加させていただくことで、あらたな見識を持つことができ、非常に良い機会と思っています。私の大学での仕事は結構広範囲で、診療の方は、基本的には診療報酬がもっとも大きな仕事になりますが、その他、外来運営委員会や病床再編成、さらには今年1月からは国際医療連携部も部長として担当しております。医療体制強化が、主には地域医療連携センター長としての仕事で、今回のコラムの主題になるわけです。地域医療連携センターには各種相談窓口や患者サポートセンターも含まれるわけですが、もっとも重要な機能が、病院のエンジンとも言える診療支援(入り口となる紹介)―社会支援(MSW)―病床管理―退院支援のすべてを包括的に持っていることです。多くの病院が同様の形を取っていると思いますが、病床管理を持って

ることが、イン(入院)―アウト(退院)のバランスを弾力的に取り、稼働率や在院日数を調整できることになります。紹介が増えれば予定入院率が増加し、一方で「断らない」救急を実施し、今年度7,000台を超える救急車を受け入れる状況で、あっという間に、成人一般病床はいっぱいになり、予定入院が入らないなどの問題を引き起こすこととなります。ここで退院支援の力がもっとも要になるわけですが、病床管理と退院支援が隣同士の部屋で密な連携を取りつつ、さらには各病床の師長とも連絡を取り、ひとりひとりの患者さんの状況や希望を伺いながら、転院調整、在宅医療機関への紹介をすすめています。大学病院でありながらも、名市大病院の特徴である大学病院としての機能と地域医療としての機能があり、その両方の機能を発揮していく必要があります。ここで活躍する退院支援の師長の力は圧倒的で、一生懸命に患者さんのことを考え、多くの医師から慕われるとともに、病院・在宅医療機関との連携がうまい。さらに、昨年、市内を中心とした後方支援となる約50病院と連携協定を締結し、支援期間の短縮、在院日数の低下に成功しています。一方、入り口となる診療支援の方では、昨年、診療支援の師長とともに100カ所以上の病院・クリニックを訪問しています。この7月から、地域医療連携サービスC@RNA Connect(インターネット予約システム)を開始しています。大学という専門性を意識して、医師ごとに予約できるような工夫もしております。

しかし、課題は本当に多数あります。まず、課題の整理からはじめ、その課題の解決のため、仕組みを作り、大きな成果を上げることは容易ではありません。まだまだ当院には不十分なところが多数あります。診療支援と退院支援の2人の師長の間で、その能力と圧倒的なパワーに支えられ、日々研鑽を積んでいます。引き続き、皆さんのサポートを得て、名古屋市立大学病院を支えていきたいと思っています。